

## 【別添資料①】

### ライブという文化を開かれた場所にするために。

- ・後藤正文 (ASIAN KUNG-FU GENERATION)
- ・文：菊地 崇
- ・抜粋：フリーペーパー “DEAL” 20号



数年前にアジカンでライブハウス・ツアーを行ったんですね。開演前、楽屋にあったモニターにスピーカー近くにいる子どもが映っていました。これは危険だって直感的に思ったんです。何の防御策も講じずに、ライブハウスに子どもがいるのは危険なんじゃないかって。スタッフが移動してくれないかと話に行ったんですけど「せっかく取ったチケットなので動きたくない」と。それで近くの量販店に探しに行ったんですけど、イヤーマフは売ってなくてヘッドホンを貸し出したんです。WHOが難聴に関する提言をしたのが2018年でした。

ライブという場は文化として開かれたものでありたい。子どもだから聞いちゃいけないってことはないですから。だけど無防備なまま参加する子どもが増えてしまったのでは、入場を規制しなければならなくなってしまうかもしれない。防御策のひとつとしてイヤーマフを貸し出しする。音に関しては、子どもに限らず大人でも危ない場面があると思っています。ライブに行って耳が聞こえにくくなった、そんな子どもたちが自分たちの現場にいたとしたら、なんとも言えない気持ち悪さがあるっていうか。

自分がどう聞こえているのかっていうのは、その人の感覚でしかないんですよね。みんなが心地いいと感じた音でも、私にはちょっと危険って感じる、その感覚に正直でいいと思うん

です。アジカンのライブに来てイヤーマフをしていたとしても失礼だとは思わない。どう聞こえているのかはあなたの問題であり、あなたの子どもの問題なので。人の目を気にすることなく、長く音楽を楽しむために、自分と自分の子どもを守って欲しいですね。

### 後藤正文 (Masafumi Gotoh)

ASIAN KUNG-FU GENERATION (アジアンカンフージェネレーション) のボーカル&ギター。1996年に大学のサークル内でアジカンを結成。2002年にルーキーアゴーゴーに出演。翌年にメジャーデビューを果たす。2011年の東日本大震災以降、「新しいこと、これからの社会のこと、未来を考える新聞」(The Future Times)を自費出版。2018年まで9号を発行した。『ゴッチ語録』(ちくま文庫)などの著作もある。2018年からアジカンのライブで子ども用のイヤーマフの貸し出しを行っている。

### 【別添資料②】

#### 子どもたちの耳を休ませること。

- ・水足邦雄 (防衛医科大学校/医学博士)
- ・文：宙野さかな
- ・抜粋：フリーペーパー“DEAL”20号



WHOが騒音に対するファクトシートを最初に出したのが2018年でした。日本や欧米諸国だけではなく、いわゆる発展途上国も含めて、スマートフォンの普及率が高くなり、イヤホンやヘッドホンで音楽を聞き続ける人が多くなっています。スマホで音楽を聞くというレクリエーションによる音によって、世界中で何十億もの人の耳が危険にさらされているというこのファクトシートを受けて、世界でいろんな動きが起きたんです。代表するひとつがiPhoneで、ヘルスケアの項目に「聴覚」が加わったのが2019年です。

例えば職域での騒音については、85デシベルの音がある状況だったら耳栓かイヤーマフをしろなさいというガイドラインが厚労省から出されています。

—iPhoneの「聴覚」を見ると、ロックコンサートは110デシベルあると。

コンサートの場合は、いろいろな楽器からいろいろな音が出ているので、トータルのエネルギーとしてはかなり大きなものとなっています。コンサートに行って音楽を楽しむということは、そのエネルギーを耳が受けちゃうということです。エネルギーを受けることで、耳の外毛が壊れてしまう。そもそも耳は、繊細な音を聞き取れるように微細な構造をしているんです。強い刺激を受けて働きが悪くなっている状態が、耳のなかで「ピー」となっている状態。いわゆる耳鳴りです。

勝手に耳のなかで音が作られちゃっているというのは、故障する一歩手前の状態なんです。子どもちに対して気をつけなければならないのは、子どもは耳鳴りをあまり気にしないっていうか、耳鳴りがあったとしてもケロッとしている場合が多い。脳がすごく柔らかいので、その状態に適応しちゃう。大人と子どもに同じアンケート調査をしたら、圧倒的に耳鳴りに対しての子どもからの訴えが少ない。自分から言い出さないんですね。

もちろん人によって違いはあるのですが、子どものほうが小さな音まできれいに聞こえています。20代後半から加齢による難聴は始まっています。ですから10代のときと40代や50代になったときでは、同じように聞こえているわけではないんです。耳のなかにあるカタツムリのような部分、蝸牛（かぎゅう）という部分なんですけど、生まれたときに完成していて、成長することはないんです。鼓膜の大きさも生まれたときに決まってしまう。音を感じる有毛細胞も再生はしない。生涯にわたる騒音の蓄積によって、聞こえは悪くなっていきます。だからこそ小さな頃から大きな音はできるだけ避けたほうがいいんです。音楽のある暮らしってというのは、すごく豊かな暮らしだと思います。だからこそ耳を消費するだけではなく、長く楽しめるようにすればどうすればいいのか。これからの時代、さらに音が溢れるかもしれない。未来がある子どもだからこそ、子ども時代から耳を休ませることが大切なんです。音を感じるための細胞に再生力がないのですから。

### **水足邦雄 (Kunio Mizutari)**

日本耳鼻咽喉科学会専門医。1999年に横浜市立大学医学部を卒業。同年4月に慶應義塾大学医学部耳鼻咽喉科学教室に入局。2006年からは助教。現在は防衛医科大学校耳鼻咽喉科学講座講師。日本聴覚医学会では難聴対策委員や広報委員を務めている。